電子回路:第3回 交流の基礎

基礎工学部情報科学科 粟野 皓光 awano@ist.osaka-u.ac.jp



交流

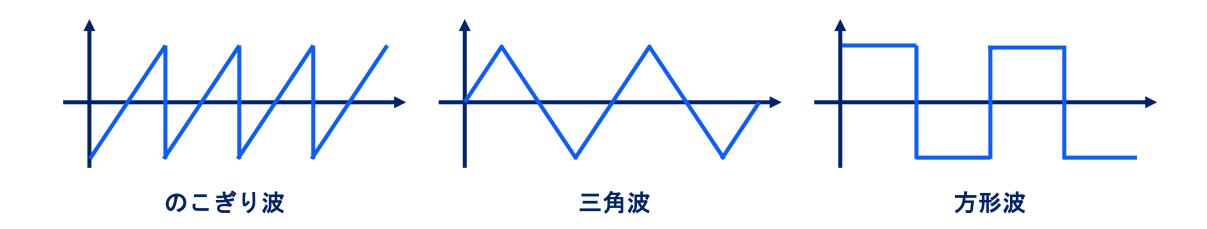
直流(DC):時間と無関係に一定の電圧(or 電流)を示す

交流(Alternating Current; AC):時間とともに周期的に向きが変化する電圧(or 電流)

交流波形の表し方:

1. 周期(T): 周期的パターン1つ分の長さ(単位:s). 周波数fは周期の逆数:f=1/T(単位:Hz)

- 2. 最大値 or 最大振幅:交流波形が示す最大の値
- 3. ピークピーク値(peak-to-peak value):最大値・最小値の差
- 4. 瞬時値:時間で変化する値(正弦波交流の瞬時値: $V_m \sin \omega t$)

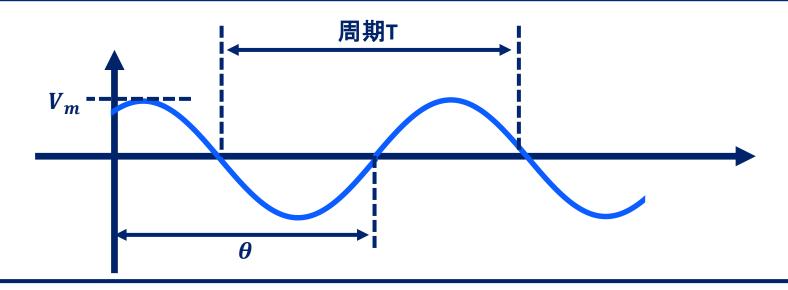




正弦波交流

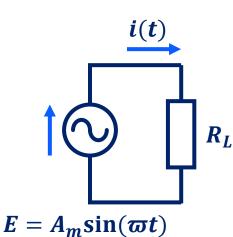
正弦波交流の瞬時値表示:

$$v(t) = V_m \sin(\varpi t + \theta)$$
 $\varpi = 2\pi f$ (角周波数 or 角速度)



実効値

抵抗に正弦波交流を印加した場合、同等の発熱効果を与える直流電圧・電流値を実効値と呼ぶ



時刻tにおける電流は

$$i(t) = \frac{E}{R_L} = \frac{A_m}{R_L} \sin \omega t$$

電力は

$$p(t) = Ei = \frac{A_m^2}{R_L} \sin^2 \omega t = \frac{A_m^2}{2R_L} (1 - \cos 2\omega t)$$

で与えられる

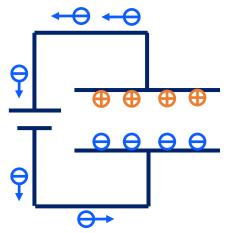
この時,平均電力は $P=rac{A_m^2}{2R_L}$ となるこれは電圧 $E=rac{A_m}{\sqrt{2}}$ の直流電圧源に抵抗 R_L を繋いだ時に消費される電力と等しい

最大値 A_m を持つ正弦波交流に対して ${f T}$ 電圧の実効値を $E=rac{A_m}{\sqrt{2}}$ と定義する

キャパシタとインダクタ

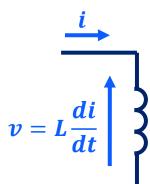
キャパシタ

電荷を貯めることの出来る素子(例:2枚の平行平板キャパシタ)



- ロ キャパシタに蓄えられている電荷q[C]と端子電圧vは比例関係にある q = Cv C: 静電容量[単位: F(ファラド)] 地球の電離層と地表間の静電容量が約1[F]
- ロ キャパシタに流れる電流をiとすると、電流は単位時間あたりに通過する電荷量なので $i = \frac{dq}{dt} = C\frac{dv}{dt}$ とも書ける

インダクタの性質

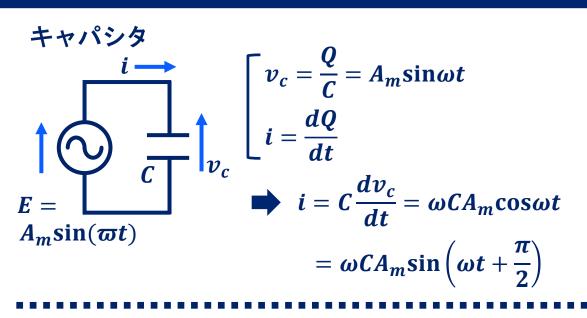


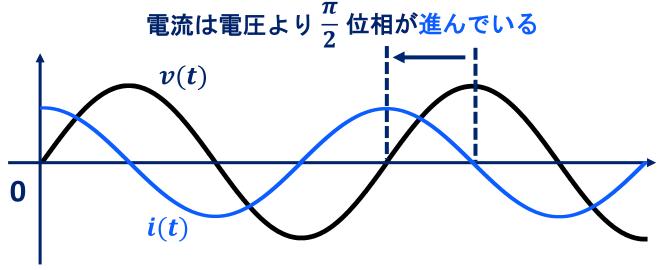
ロインダクタを流れる電流の変化を妨げる方向に電圧を発生させるインダクタ両端の電圧vを左図の向きに取ると

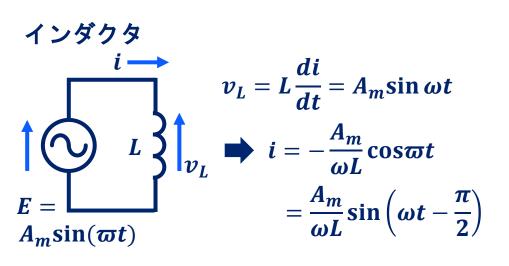
$$v = L rac{di}{dt}$$
 L : 自己インダクタンス[単位:H(ヘンリー)]

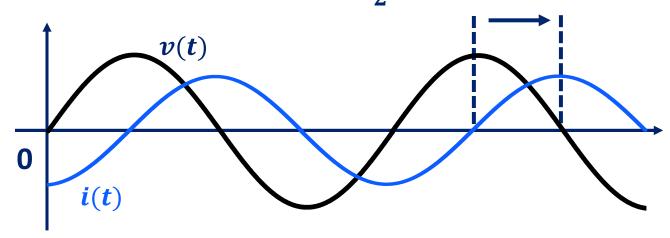


正弦波交流を印加したときのキャパシタ・インダクタの振る舞い



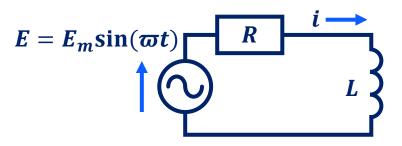






電流は電圧より $\frac{\pi}{2}$ 位相が遅れている

RL交流回路



回路方程式: $L\frac{di}{dt} + Ri = E_m \sin \varpi t$

(Step1)同時方程式の解を求める:

$$L\frac{di}{dt} + Ri = 0 \Leftrightarrow \frac{di}{i} = -\frac{R}{L}dt$$

$$\Leftrightarrow \log|i| = -\frac{R}{L}t + C$$

$$\Leftrightarrow \mathbf{i} = \pm \mathbf{C}e^{-\frac{R}{L}t} = \mathbf{C}e^{-\frac{R}{L}t}$$

(Step2)定数変化法でCを決める:

Cをtの関数C(t)として回路方程式に代入すると

$$L\frac{dC}{dt} = E_m e^{\frac{R}{L}t} \sin \varpi t$$

これを積分して

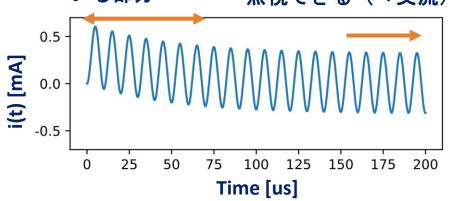
$$C(t) = \frac{E_m}{\sqrt{R^2 + \omega^2 L^2}} e^{\frac{R}{L}t} \sin(\omega t + \varphi) + A$$

$$\varphi = \tan^{-1}\left(-\frac{\varpi L}{R}\right)$$

(Step3)求まったCを同時方程式の解に代入して一般解を得る:

$$i = \frac{E_m}{\sqrt{R^2 + \omega^2 L^2}} \sin(\omega t + \varphi) + Ae^{-\frac{R}{L}t}$$

expの項が効いて 時間が経つと過渡部分は いる部分 無視できる(⇒交流)



簡単な交流回路でも微分方程式を解くのは大変 そこで、複素数表示を導入する

部分積分

$$\int f(x)g'(x)dx$$

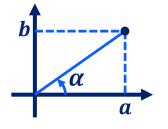
$$= f(x)g(x) - \int f'(x)g(x)dx$$

三角関数の合成

 $a\sin\theta + b\cos\theta$

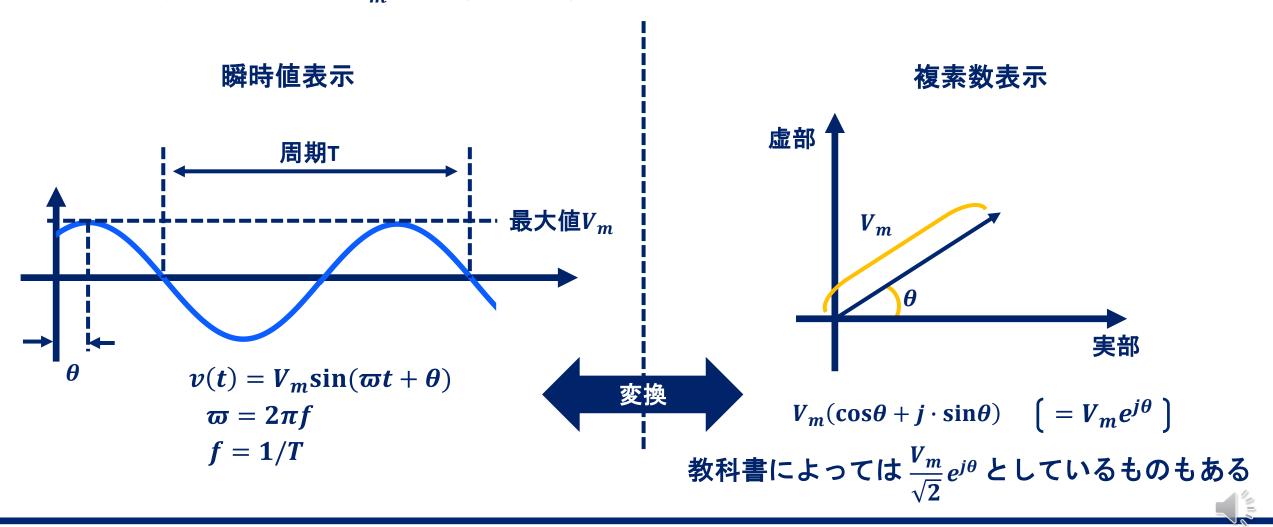
$$=\sqrt{a^2+b^2}\sin(\theta+\alpha)$$

$$\alpha = \tan^{-1}\frac{b}{a}$$



瞬時値表示と複素数表示

- ・ 交流は瞬時値 V_m と位相 θ で一意に特徴付けられる (交流回路理論では、角周波数 ϖ は回路全体で共通とするので独立パラメータには含めない)
- ・ 見通しを良くするために V_m と θ を複素数で表現する



微分

$$v(t) = V_m \sin(\varpi t + \theta)$$

積分

$$\frac{\mathrm{d}v(t)}{\mathrm{d}t} = \varpi V_m \cos(\varpi t + \theta)$$
$$= \varpi V_m \sin(\varpi t + \theta + \frac{\pi}{2})$$

これを複素数表示に変換すると...

つまり複素数表示された世界でjωを掛けるという操作は、時間領域で微分しているのと同じ

$$\int v(t) dt = -\frac{1}{\varpi} V_m \cos(\varpi t + \theta)$$
$$= \frac{1}{\varpi} V_m \sin(\varpi t + \theta - \frac{\pi}{2})$$

これを複素数表示に変換すると...

$$\frac{1}{\varpi}V_{m}\left(\cos\left(\theta-\frac{\pi}{2}\right)+j\cdot\sin\left(\theta-\frac{\pi}{2}\right)\right)$$

$$=\frac{1}{\varpi}V_{m}(\sin\theta-j\cdot\cos\theta)=-\frac{j}{\varpi}V_{m}(j\cdot\sin\theta+\cos\theta)$$

$$=\frac{1}{j\varpi}\frac{V_{m}(j\cdot\sin\theta+\cos\theta)}{\pi波形の複素数表示}$$

つまり複素数表示された世界でj

で割るという操作は、時間領域で積分しているのと同じ



複素数表示の性質まとめ

微積分と複素数表示

瞬時値表示: $v(t) = V_m \sin(\varpi t + \theta)$ 複素数表示: $V = V_m e^{j\theta}$ のとき

$$\frac{dv}{dt}$$
 の複素数表示は $\frac{j\varpi V}{j\varpi V}$ で与えられる $\frac{1}{j\varpi V}$

加減算と複素数表示

瞬時値表示: $rac{v_1(t)=V_{m1}\mathrm{sin}(\varpi t+ heta_1)}{v_2(t)=V_{m2}\mathrm{sin}(\varpi t+ heta_2)}$ 複素数表示: $rac{V_1=V_{m1}e^{j heta_1}}{V_2=V_{m2}e^{j heta_2}}$ のとき

 $v_1(t) \pm v_2(t)$ の複素数表示は $V_1 \pm V_2$ で与えられる



複素数表示を使った微分方程式の解法

例題:
$$0.02\frac{d}{dt}x(t) + 0.25 \cdot x(t) = 3.5 \cdot \sin\left(120\pi \cdot t + \frac{\pi}{6}\right)$$
 を解け

1. 右辺を複素数表示に直す

$$3.5 \cdot \sin\left(120\pi \cdot t + \frac{\pi}{6}\right) \Leftrightarrow 3.5\left(\cos\frac{\pi}{6} + j\sin\frac{\pi}{6}\right) \approx 3.03 + j1.75$$

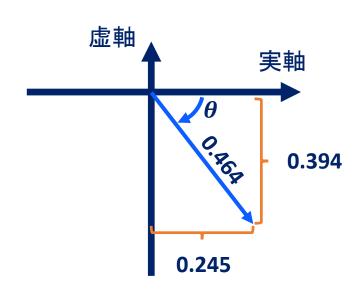
2. x(t)の複素数表示をXと置いて左辺も複素数表示に直す

$$0.02\frac{d}{dt}x(t) + 0.25 \cdot x(t) \Leftrightarrow 0.02 \cdot j \cdot 120\pi \cdot X + 0.25 \cdot X$$

3. 複素数表示に直した式を代数的に解く

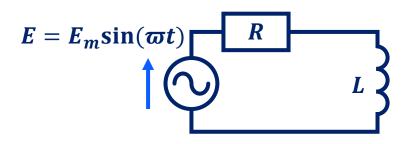
$$X = 0.245 - j \cdot 0.394 \Leftrightarrow x(t) = 0.464 \cdot \sin(120\pi \cdot t - 1.01)$$

複素数表示を使うことで微分方程式を代数的に解くことが出来る



$$\theta = \tan^{-1} \frac{-0.394}{0.245} \approx -1.01 [rad]$$

RL交流回路を複素数表示で解いてみる



回路方程式: $L\frac{di}{dt} + Ri = E_m \sin \omega t$

(Step1)複素数表示に変換:

$$L \cdot j\varpi I + RI = E_m(\cos 0 + j \cdot \sin 0) = E_m$$

I: 電流i(t)の複素数表示

(Step2)代数的に解く:

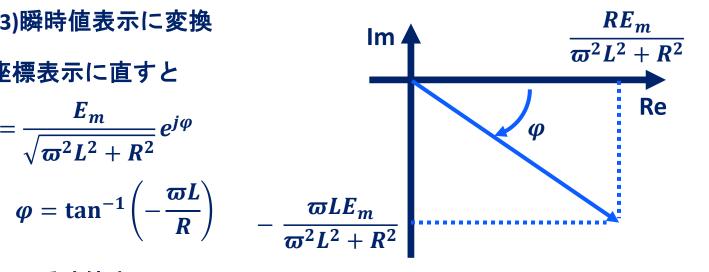
$$I = \frac{E_m}{i\varpi L + R} = \frac{E_m}{\varpi^2 L^2 + R^2} (R - j\varpi L)$$

(Step3)瞬時値表示に変換

極座標表示に直すと

$$I = \frac{E_m}{\sqrt{\varpi^2 L^2 + R^2}} e^{j\varphi}$$

$$\varphi = \tan^{-1}\left(-\frac{\varpi L}{R}\right)$$



よって瞬時値表示は

$$i = \frac{E_m}{\sqrt{\varpi^2 L^2 + R^2}} \sin(\varpi t + \varphi)$$

※この解法ではexp(...)の項が出てこないことに注意!

交流回路解析では,時間が十分に経過した定常状態 しか解析できない

